

特279

359

中西伊之助著

自治と

ロシア共産黨  
及び明日への

特279-359



\*76W10966 \*

LA LIBERO PAMFLETO



Serio I

自由思想研究會

×  
複写

特279-359



始





中西伊之助著

長篇小説 國と人民

定價貳圓八十錢

本書は、「近代日本」の創世記である。日清戦争の深刻なる内部的解剖を題材とし、駭れる鳳凰の如く描かれた東洋の一女性政治家―本篇の女主人公―をとりめぐる政權の争奪、戀愛の血戦母性の悲劇、結婚愛の悲涙、そして強き民衆の反抗運動等々、あらゆる人類の諸相を捕へ、雄大の構想、勁烈の筆致をもつて表現されたる國民史的小説である。

東京市神田區錦町三ノ三

平 凡 社

取次パンフレット

的間雁二著	かくて村は廻へる	十
下中彌三郎著	非政黨同盟の主張	十
小田就三著	現代少年の社會觀	十
下中彌三郎著	万人労働の哲學	十
大西伍一著	大衆兒童の生活	十
高群逸枝著	婦人からの抗議	十
石川三四郎著	士民生活に就て	十
岡本利吉著	農村と消費組合	十
エリセツケリ著	原始労働論	十
下中彌三郎著	土の國史	十
クロボトキン著	青年に訴ふ	十
クロボトキン著	革命の研究	十
石川三四郎著	サンザカリズムの話	五

このパンフレットに廣告せる書籍は、當會で特價取次します。

自由思想研究會

序

ほんさうに正直な心をもつた、労働者、無産農民なら、この本が眞理を書いたのだと云ふことを、承認してくれるだらう。

一九二七、一、五、

著者

上野乙子  
議者



中西伊之助著

長篇小説 國と人民

定價貳圓八十錢

本書は、「近代日本」の創世記である。日清戦争の深刻なる内部的解剖を題材とし、驕れる鳳凰の如く描かれた東洋の一女性政治家―本篇の女主人公―をとりめぐる政權の争奪、戀愛の血戦母性の悲劇、結婚愛の悲涙、そして強き民衆の反抗運動等々、あらゆる人類の諸相を捕へ、雄大の構想、勁烈の筆致をもつて表現されたる國民史的小説である。

東京市神田區錦町三ノ三  
平 凡 社

取次パンフレット

的間雁二著	かくて村は甦へる	十錢
下中彌三郎著	非政黨同盟の主張	十錢
小田就三著	現代少年の社會觀	十錢
下中彌三郎著	万人労働の哲學	十錢
大西伍一著	大衆兒童の生活	十錢
高群逸枝著	婦人からの抗議	十錢
石川三四郎著	士民生活に就て	十錢
岡本利吉著	農村と消費組合	十錢
エリゼット著	原始労働論	十錢
下中彌三郎著	土の國史	十錢
クロボトキン著	青年に訴ふ	十錢
クロボトキン著	革命の研究	十錢
石川三四郎著	サンザカリズムの話	五錢

このパンフレットに廣告せる書籍は、當會で特價取次します。

自由思想研究會

序

ほんさうに正直な心をもつた、労働者、無産農民なら、この本が眞理を書いたものだ云ふことを、承認してくれるだらう。

一九二七、一、五、

著者

上野乙子  
議者



## 目次

一、善玉と悪玉	一
二、踏み臺とはどんな臺か	三
三、ロシア革命はボルセエグ井キが起したのではない	六
四、ケレンスキイに欺かれた労働者、兵士、農民	七
五、レーニン労働兵會を奪ふ	一一
六、共産黨獨裁（労働組合は共産黨の機關）	一四
七、資本家への屈服	一六
八、政權は誰の手にあるのか？	一七
九、これでも過渡時代か？	二一
一〇、共産主義教育で救へるか！	二二
一一、政治的マルクス主義の崩壊	二三
一二、悲劇的人物レーニン	二五
一三、生産者自治主義	二六
一四、新時代への明確な智識、希望	二八

76W10966



## 自治と政治

中西伊之助 著



### 一、善玉と悪玉

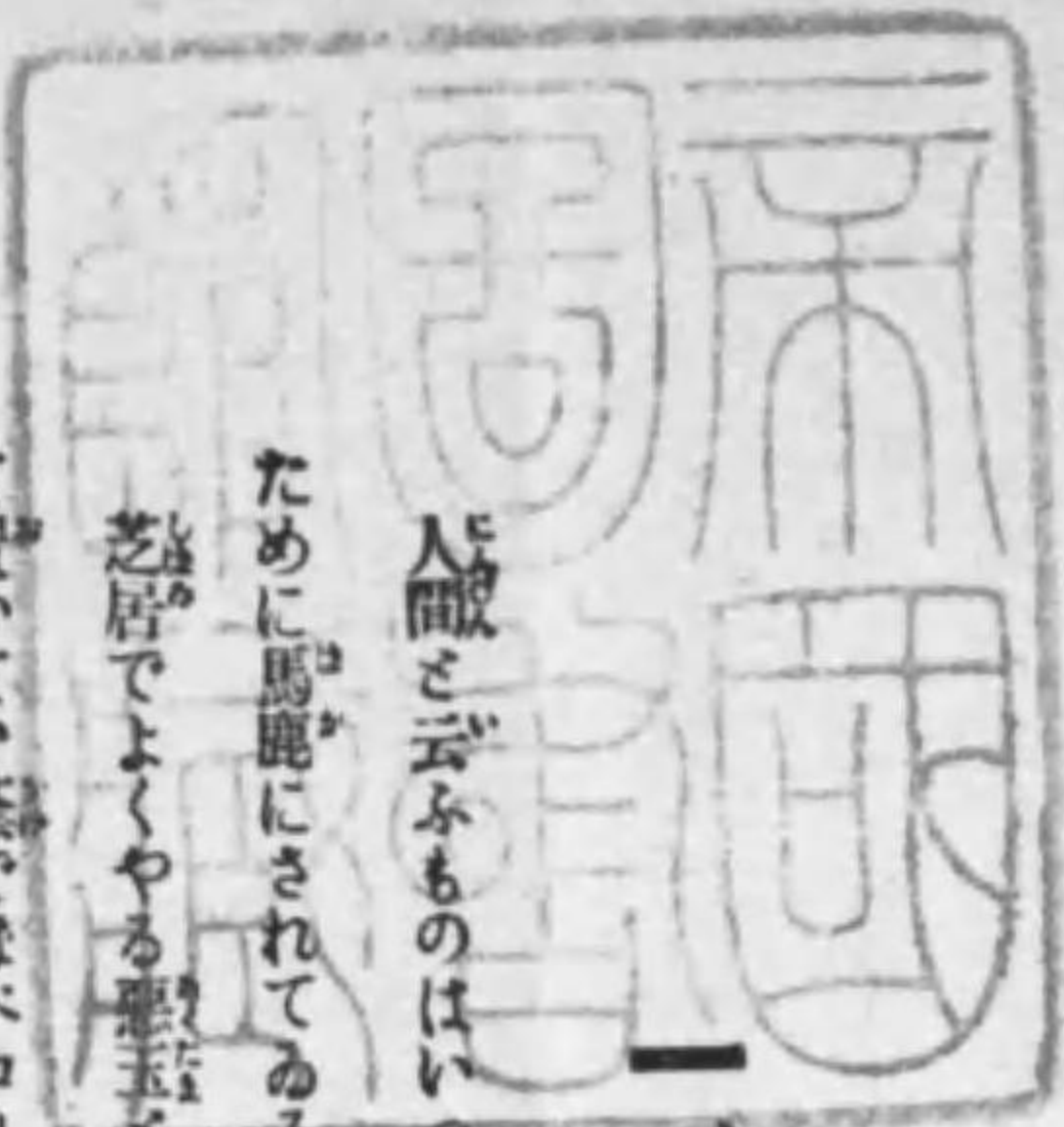
人間と云ふものはいつも世の中の上ツ皮ばかり見て、その裏を知らない。そして上ツ皮で胡麻化しの巧な奴の

ために馬鹿にされてゐる。

芝居でよくやる悪玉と云ふ奴は、この胡麻化しのウマい奴である。上ツ皮ではいかにも實意のあるやうに見せ

て置いて、陰ではペロリと赤い舌を出してゐる。そこへ行くと言玉の方はこの胡麻化しが巧くない。お上手も云はないし、機嫌も取らない。否、それとは反對に聞く人の耳に逆るふやうなことを云ふ、そこで昔の我儘な馬鹿殿に手討にされてしまふ、そしてまんまと馬鹿殿は悪玉にお家を横領されると云ふ筋になるのである。

だが、これを昔のお家騒動だと思つてはならない、今の世の中——昭和の聖代にもやはり昔のお家騒動の中に





出て来る善玉と悪玉が、ちやんとあるのである。そしてこれは、我々無産階級の解放運動の中に最も純然と活躍してゐることを、先づ何よりも氣づかねばならない。

労働者解放、農民解放と、色々な甘い言葉をかけて世の中をさび廻つてゐる連中には、右に云つた悪玉がかなり多い、しかし彼等は第一、口が上手だ。理屈がうまい、宣傳が巧だ。いはゆる巧言恰色の徒だ。そこで孔子は『少仁』と云つたのだが、しかし、この巧言恰色の徒には馬鹿殿はいつもたまされる。いや馬鹿殿ならいくらたまされてもいい、が正直な農民や労働者がたまされるのだから、さうしても黙してゐるわけにはゆかないのだ。そこでこのパンフレットは、さうした農民や労働者をたます悪玉の面の皮をひんむくために書いたものである。そして將來農民や労働者が、いかなることを考へ、また行つて行かねばならぬかを、率直に述べたものである。で、このパンフレットは、農民や労働者を踏臺にして、自分がこの世の中に立身出世しようとする人には、極た都合の悪いことを書いてあるものと云ふことを、あらかじめ承知して置いて買いたい。農民運動者の眞の社會——即ち農民や労働者のお家を横領しようとする連中には、このパンフレットは喜ばれないのである。しかしそんな腹からの悪玉でなくても、その悪玉に巧に胡麻化されて、それを信じ切つてゐる善良な人もあらう。そう云ふ人は、本書をさうかしきまでよんで買ひたい。そして十分によくわかることならうと思ふ。

(2)

## 二、踏み臺とはどんな臺か

農民や労働者を踏み臺にする云ふが、それは一たいどんなことをするのかとさきく人があるだらう。たまた一言にそんなことを云つてゐたのでは、一種の中傷さしと思へない云ふ人もあるたらう。そこで僕はその踏み臺とはどんな臺か一つ説明してみたいと思ふ。

で、それを説明するには、僕は一つの落語の筋を話さう。その方が手ツ取り早くよく解るからである。

あるところに一人の男があつたが、そのおかみさんは愛結ひをしていゝ収入があつた。そこでその男は毎日遊んで酒はがりのんでゐた。ところがおかみさんはある日、一寸したことから夫婦喧嘩をして、仲人になつてくれた爺さんのところへかけこんで、『あの人は別れます、少しも私を可愛がつてくれないから』と云つた。そこで仲人の爺さんは『いやいや、まあさうあつてなくてもいゝ、あの男は日頃からお前さんを可愛がつてゐるやうにわしは考へてるよ、お、さうだ、いゝことがある、一つ歸つてやつて見てはさうか』と云つた。そして爺さんはおかみさんにさう教へた。

「お前さんの亭主が、もしお前さんをほんとうに可愛がつてゐるのなら、お前さんが家に歸つた時、棚の上にて

(3)



も棄つてある亭主の大切な瀬戸物か何かを取りおとすのだ。そして、誤つたふりをして落してこわしてしまふのだ。その時お前さんはわざと足をすべらかして轉んでみせるのだ。すると亭主が「おい瀬戸物をこわしたな」と云つたら、亭主はお前さんを可愛がつてゐない證據だ。しかし「おや、お前さんも怪我はしなかつたか」と云へばそれこそお前さんを可愛がつてゐる證據だ。で、もし、お前さんを亭主が可愛がつてゐなかつたら、そう云ふがいゝ、わしはすぐ離縁話をしてやるから」

そこでそのおかみさんは、すかり爺さんの云ふことに感心してすぐ歸つてその通りやつてみた。ところが亭主は、ころんたおかみさんのところへやつて来て、「おや、お前さんも怪我はしなかつたか？」とやさしく云つてこわれた大切な瀬戸物のことはなんとも云はなかつた。

するとおかみさんは、非常によろこんで「お前さん、わたしをそんなに可愛がつてくれるのかい」ときいたら亭主は、うなづいて「さうよ、お前が怪我をしたら、俺は遊んで酒をのむことができなくなるからなあ」と云つたことさ。

労働者、農民諸君、世の中には、諸君を解放するために運動すると云ふ連中に、この髪結ひの亭主みたいな男がすいぶん多いのを知つてゐるか。

(4)

もつとも、彼等はこの亭主のやうに「正直に遊んで酒をのもう」とは云はない。しかし、諸君を踏臺にして、そのうちに政敵でも握つて、資本家階級や権力階級と握手して、諸君のあぶらや血をすゝらうと云ふ、恐ろしい吸血鬼のゐることを警戒して買ひたい、僕の云ふ踏臺とは、こう云ふことを云ふのである。

無産階級解放運動を口にする連中で、この髪結ひの亭主共を政治家と云ふのである。今やこの亭主共は、プロレタリア政黨と銘打つて大ひに農民、労働者の標幟を取らうとしてゐる。そして農民、労働者を、新しい手段で支配し搾取しようとしてゐる。

(5)

だが、日本はもちろん、現在の世界の農民と労働者がこうした政黨と政治家を一切排斥して、自分自身の眞の自活に自覚なければ、いつまでたつても解放されない。即ち彼等の政治を排して、自分達の自活の社會を作らねば斷じて、眞の幸福と自由と平和を持ち來されないことを、僕はこれから説明して行きたいのである。(僕の前に著したパンフレット「政治運動と經濟運動」も合せてよんでほしい)



### 三、ロシア革命はボルセエヴ 井キが起したのでない

そこで僕は抽象的の議論をやめて、目の前の大きい歴史的事實で實證して行くことにする。それならは何人も反對することができないからである。

その最も例は、一九一七年のロシア革命だ。それからその翌年のドイツ革命だ。この二つは、さちらも農民や労働者が政治家のために馬鹿な目にあつたものとして、甚だしい適例である。そこで先づロシアから話さう（ページがなければロシアだけで終るかも知れない。）

普通一はんに（これはボルセエヴキの宣傳でそう信じてゐるのだが）一九一七年のロシア革命は、レーニンなどのボルセエヴキが主動となつて革命を起したやうに考へられてゐる。しかしこれは少しでもあの當時の歴史を知つてゐるものならその然らざることを知つてゐる。あの革命は純粹の兵士と、労働者と農民が、歐洲大戦の慘害たる影響を受けて起したのである。その時、ロシアの社會主義政治家、政黨は、袖手傍觀してゐたのである。レーニンなどは全く労働者、農民などには知られてゐなかつた。彼は強西かごかに悠々閑々としてゐた

(6)

のだが、「秋來れり」とばかりに本國へ歸つた、しかし、労働者や農民はボルセエヴキの名や、レーニンなどのことは、少しも知つてゐなかつたのである。それほど、彼はロシアの労働者や農民とは縁が薄かつたのである。ボルセエヴキなどは、ロシア革命に手も出さなかつたのである。

然るに、なぜ彼がロシアの政權を握つたか云ふに、それには彼の巧な戰術があつたのだ。日本のボルセエヴキと稱するものでも、この戰術を學んで陰險惡らつた手段を用ひるが、しかし、日本の労働者農民は、アンアルヘベント（目に一丁字のないもの）が八割を占めると云ふあの當時のロシアの労働者農民とは、少しわけが違ふ、レーニン主義の直譯、いや誤譯をやつても、日本では通用しない。

で、大政治家レーニンが、ささくさまきれに、まんまと政權を奪ひ取つた経路を、こくかんとんにお話ししよう

(7)

### 四、ケレンスキイに欺かれた 労働者、兵士、農民 (勞兵會成立の経路)

一九一七年三月には、ロシアの西部戦線は連戦連敗で、兵器食糧は盡き、兵士や労働者は、皇帝のために戦争



をつけることに断乎として反対した。そこでベテログラードに擾亂が起つたのだ。

機を見て、自己の野心を遂げるこの巧なのは政治家である。来るべき時代は、もはや貴族、富豪のものではないと見て取つたのは、社会革命黨（名は革命黨だが實はブルジョア黨）のケレンスキーやチヘーゼ等であつた。彼等は、革命の主動者である兵士、労働者、農民を味方（ふみ臺）にして皇帝から政權を奪はうとした、そこで三月十二日にタウリン宮内で相談會を催して、革命の中心機關を作ることにした。即ち、叛亂を起してゐる工廠の労働者から、一千人に一人、軍隊の各中隊から一人と云ふ風に代表者を招集した。こうしてでき上つたのが、あの労働會である。

何しろ、反抗して亂暴はするが一向組織や統一のない、お人のい、兵士や労働者である。それが代議士と云ふ偉い政治家のお召に預かつたのであるから、欣々然として伺候したわけである。このへんから、ロシアの兵士や労働者は政治家と云ふ古理にたぶらかされ始めたのである。無智な、自治的精神のないロシア労働者、兵士、農民は果してこんなことになつて行くだらう？

さて、偉い代議士、ケレンスキー、チヘーゼ、スコーベレフなどに召された兵士、労働者は、先づチヘーゼ閣下を議長として奉りあげた。いやチヘーゼ閣下は自ら議長になるやうに、前からチャンと仕組まれてあつた。

そしてケレンスキーとスコーベレフは副議長の椅子に附まつた。そして労働會を作つたのだ、こうなれば止めたものである。兵士、労働者は彼等政治家の頭で動くのであるから！

そこでこの政治家共は、熱心に兵士労働者を煽り上げ、皇帝に退位を迫ることを約束した。これはもう大丈夫である。兵士と労働者が自分の手にあるのだから、即ち、兵馬の權は皇帝になくて、自分の手にあるのだから、皇帝に退位を迫つても少しも危険ではない。

だが記憶すべきことは、ケレンスキー等はつい先日まで、皇帝のために忠良なる政治家であり皇帝の政策を從順に支持してゐた輩である。そして兵士と労働者の利益を無視してゐた輩である。然るに一朝、革命が勃發して兵士、労働者に、國の中心勢力が移ると、彼等は浮雲の如く、兵士と労働者の方へ走るのである、このカルワザが即ち政治家の得意とするところである。

ケレンスキー等の作つた労働會は、なかなか景氣のい、直言をした。そして労働會に加入しない兵士労働者を誘惑した。そこで労働會は猛烈な勢いで數を増し、ケレンスキーは皇帝に退位を迫り、舊政府を倒し、まんまと自分の手に政權を握つた。

「ツァールの政府は國民に與ふるにパンをもつてせず、一齊射撃を以てせり、我々は舊政府を倒さざるべからず」



労働者のクレンスキイは、こう宣言した。これは、いかにもその通りである。しかし、こんな景気のい、宣言をして政権を握ったクレンスキイは、果してそんなことをしたか云ふに、彼もやはり、「國民に與ふるにバンを以てせず一齊射撃を以てした」のである。

即ち、彼は一度握った政権を放すまいとした。そして自己の握った強大なる権力を直に戦線に苦闘してゐる兵士の上に向けた、彼は戦線にゐる兵士に向つて「進んで戦へ、然らずんば、背後には断頭臺がある！」と威嚇した。そのために、彼の機嫌を取るために一度停止した死刑を復活した。そして六月十八日にはガリシヤ方面に大動員をして攻撃戦に従はしめた。

が、この攻撃戦は惨敗した。そしてこの頃から、レーニン、トロツキイのホルセエヴキキが機逸すべからずとして猛烈なる活動をはじめたのである。

クレンスキイが兵士、労働者、農民の利益を無視して、なぜそんな無茶なことをしたか、その理由はかんたんである。彼は當時また勢力のある資本家の政黨と提携して自己の政権を握つてゐたかつたのである。政権を握つてゐるためには、労働者、兵士、農民などの利益を考へてはゐられなかつたのである。

## 五、レーニン労働者を奪ふ

機逸すべからず、政権を獲得するは、この一戦にありと見たのは、レーニン等のホルセエヴキキ政治家であつた。

だがこの際もしクレンスキイがもう少し精巧な政治家であつたら、れいの「労働者獨裁」でホルセエヴキキを叩き伏せたであらう。いや、そこまで云ひ出さなくとも、「戦争休止」で十分たつたのだ。ドイツのシカイデマンは、ロシアの前線のくつがへたのを見て、「戦争休止」と出て、リヒアクネヒト等を叩き伏せてしまつたではないか。これは後にも少しくわしく話せるかも知れない。

さて、クレンスキイが、戦争繼續なんかをやつて、ぐずぐずしてゐる間に、レーニンは、すっかり労働者を自分の手に入れてしまつたのである。ロシアの兵士、労働者、農民は、クレンスキイと云ふ親方を早捨て、レーニンと云ふ親方の子分になつてしまつたのである。親方側から見ると、クレンスキイ親分は、レーニン親分にすっかり縄張りをしてやられたのである。

そこへ行くと、レーニンの方は、多少言ひ分が通つてゐた。それはレーニン等は最初から戦争には反対してゐる



たのである。ところが、彼等の強味だった。兵士や労働者は、戦争さへやめてくれならそれでいいのだ。これはボルセエヰキの思ふツボである。そこでレーニンは戦争速時休止の上に大きいお添物をつけた。曰く「労働者獨裁」「土地分賦」

「土地分賦」はケレンスキイも云つたのであるが一向實行しようとはしなかつた。そこで農民は大いに憤慨してゐたところなので、レーニンは、そこをネラつたのである。だがロシアの大部分の労働者は「労働者獨裁」なんて言葉を全く知らないのだ。知つてゐるものは「土地分賦」だけである。兵士は大部分農夫の子であるから、兵士等にもよくそれだけは解つた。そこで「戦争を休止」して、「土地を分賦」すると云ふのだから、農夫の子である兵士の喜んだのはあたりまへである。

そこで政權争奪の本盤になつてゐる労働兵會は、すつかりレーニンへ共鳴してしまつた。こゝんごろをよく注意すると、ボルセエヰキが世界でやつてゐる運動がよく解る。即ち、レーニンは、政權を獲得するには、労働兵會を擧取りすることであつたのだ。そしてそれに成功したのだ。そこでボルセエヰキは、他人の作つた團體を擧取りする政策を一手取置さ心得るやうになつたのである。だが、ロシアのあの時のような無智な労働者、兵士ならいざ知らず日本のやうに進歩してゐる労働者、農民では少し勝手が違ふ。

こうして、レーニン、トロツキイ等は、巧に労働兵會を自分達のものにしてケレンスキイから政權を奪つた、そして「労働者獨裁」「土地分賦」等、彼一流のボルセエヰキ主義を、ロシアに敷かうとした。これがいはゆる三月革命である、さあ、そのレーニンが果してケレンスキイよりも、もつさい、「政治」をしたであらうか。いや、ロシア共産主義政治、即ちボルセエヰキなるものが果して労働者、農民を、解放に導いたであらうか、僕等は冷静に考へてみなければならぬ。

僕はこの、ロシア共産黨があらゆる非常手段をつくして政權維持をやつたことを、くさくさ説明することをやめる。恐らく非常時には資本家、軍閥、政敵に向つて非常手段を取ることはやむを得なかつたのであらう。それを徒らにセンチメンタルな人道主義で云々することは愚である。この點では、我々は他のボルセエヰキの非難者とは一致しないかも知れない。

農民労働者の考へねはならぬことは、かゝる非常時の非常手段の可否ではなく、ボルセエヰキの取つた政策が果して農民、労働者にどんな結果をもたらしたかと言ふことである。我々は冷静な態度でそれを見よう。



## 六、共産黨獨裁

(労働組合は共産黨の機關)

一九二〇年の共産黨第九回大會では「労働階級獨裁の時代に於ては、労働組合は、支配しつゝある労働階級の機關となる」と言ふ決議が通過した。

此の決議の意味は、ちよつと見ても何のこゝとやら解らない、たが、翌年の大會で次ぎのやうな演説を見れば、はつきりわかる。

「共産黨は、その中央及び地方機關によつて、無制限に労働組合の事業の精神的方面全部を指揮するのである」これによるこゝ、共産黨と云ふ一つの政黨が労働組合を無制限に支配し、教育指導して行かうといふのである。そしてその組合の幹部はすべて共産黨から公認された人々をもつてこれに當るやうにした。

しかし自主自治をその精神とする労働組合はかくの如き専制に服するものではない、一九二〇年にベテログラードの印刷工組合は投票によつて組合幹部を選挙したが、共産黨政府は彼等に向つて種々なる中傷的宣傳をして、夜中突然組合の幹部を拘捕し、その事務所を軍隊をもつて占領した。そして拘捕者は公判に附せず六ヶ月

乃至二年の懲役を宣告した。

レーニンの意見によるとロシアの労働者は未だ工場を管理する能力がない、従つて彼等に工場を管理させて置く、生産能率が擧がらない、そのために労働組合を共産黨國家の支配下に於てその指導教育に任ずると云ふのである。そのために、前に述べたやうに「無産階級獨裁の時代にあつては、労働組合は支配しつゝある労働階級の機關となる」と云ふやうな譯のわからぬことをいひ出したのである。「労働組合が支配しつゝある労働階級の機關」とは何のことであるか、それは労働階級とは労働組合のことではないのである、「支配しつゝある労働階級」とは共産黨を指すのである。共産黨が「支配しつゝある労働階級」であるとは、何ぞ馬鹿々々しい論法ではない。即ちボルセエヰキのいふ「労働者獨裁」とは「共産黨獨裁」を云ふのであつて。決して眞の労働階級の獨裁ではないのである。

こんな論法は、ロシアの労働者には胡麻化しが利くかもしれないが、少し進んだ國の労働者なら相手にしない。それなのに日本の労働者の中には、またこの「労働者獨裁」を文字通り信じてゐるものが多い、呆れた話である。



## 七、資本家への屈服

さてそれからである。レーニンの政策のやうに労働組合を共産黨政府の無制限の支配下に置いて、それを教育し、指導することもよからう。共産黨はロシアの労働者に工場管理の能力さへないものだぞ云つてゐるのだからしかし、このロシアの労働者に管理能力がないといふことにも、彼等のなかなか巧な術策のあつたことばだしである。それを述べては長くなるからやめる。そのくわしいことは近刊拙著「世界解放運動史講話」をよんで買いたい。

ところがレーニン政府は、政權を握つて後、その政權支持のために莫大な金が必要となつて來た。彼等の政權は三百萬の赤衛軍によつて支持されてゐる。これを十分に養つて置かなければ、彼等はその政權を支持することができない。そのためには、政府は地方農民に赤衛軍を送つて、盛に食糧を徴収させた。いや、掠奪させた。そしてこれを「パンの十字軍」といふ、美名を冠させた。それが農民の強い反抗となつて、政府の安危にかつて來た。そこで赤衛軍に工場労働をさせる様になつた。また政府は赤衛軍を減じなかつた。それは彼等が農村へ歸つた時、共産黨政府に叛旗を翻すのが恐ろしかつたのである。

(16)

モスクワに強大な中央集權政府を置いて、その政權支持のために莫大な國費を必要とする結果、政府は遂に資本家に屈服しないではゐられなかつた。それがいはゆる新經濟政策である。

即ち共産黨政府は、一九二〇年七月五日に、國有工場、鑛山、森林等の特許貸下けを行つた。その貸下けを受けたものは、ロシアの資本家はかりでなく、外國の大資本家も多數あつた。否むしろ、政府は外國の大資本家の巨額の投資を受けたいのが目的であつた。かくてロシアの労働者は、またも資本家の下に搾取される運命に置かれた。

政府の精明によると、貸下には一定の法律的制限がつけてあるといふ、しかしそんなものは一片の空文である。財的勢力のまへにそんな制限は何になる。その證據は實に次ぎの通りである。

(17)

## 八、政權は誰の手にあるのか？

そこで労働組合はさうなつたかぞ云ふに、もし共産黨政府が自己の支配下に労働組合を置いておくことにすれば、政府は當然、内國の資本家はもちろん、外國の資本家とも對抗しなければならぬ。しかし、共産黨政府はもはや資本家を容認して、それ等から多額の税金を取り立てなければならぬ、彼等は資本家と對抗することの



できないばかりでなく、むしろ保護する立場に立つたのである。主義はさにかく、事實に於て他の資本家國家と同一の立場にある。そこで一度自己の支配下に置いて、自己の機關と主張した労働組合を、再び獨立せしめねばならなくなつた。

労働者は馬鹿を見たのである。彼等は『労働階級獨裁』の政府を有しながら、再び大資本家の工場で、資本家と對抗して戦はねはならなくなつたのである。ロシアの労働者は、狐につまゝれてゐるやうな氣がするであらう。そこで共産黨政府はさういふ條件の下に、労働組合の獨立を承認したか、それは大略次のやうな一九二二年二月十二日の法律によつて定められた。

- 一、強制加入の方法を廢して、任意加入とすること
- 二、罷工基金の積立、爭議委員設置等の自由を認めること
- 三、共済制度を設ける自由
- 四、民衆、官業の工場に對し、労働條件の改善の要求をなす自由
- 五、政治運動に参加するを許す

ざつと右のやうなものである。

この五項目は二たい、何を意味してゐるのたらう？殊に○印をつけたところをよく讀んで買いたい。

まづ、その第一項から説明する。

第一項、これは明白に資本家保護政策である。共産黨政府は、労働組合を國有し即ち官設にする時、労働組合に強制加入すべき規定を設けて、全部労働者を労働組合に加入せしめたのである。然るに、資本家の企業を承認して、労働組合を獨立せしめると、直に強制加入を廢して、任意加入にしたのである。即ち労働者は任意に組合から脱退して、罷工破り、その他の團結運動をしなくてもいゝのである。これは資本家にとつてさのくらしい利益であるかしのれないと同時に、労働組合にとつては、これほど不利益なことはない。共産黨政府の資本家保護政策もあまりに露骨ではないか。

第二項、第三項、こんな規定が『労働者獨裁』で、しかもマルクス主義政府の治下にあるシロアの労働組合たごは、だれが想像しよう！資本主義全盛の日本の労働組合たつて、も少し氣の利いたものだ。日本のロシア共産主義者はこれで目がさめなければもう眠がない。

第五項、これほどへんてこな制限はない。ロシアの労働者はもうさつと以前に『政權を獲得』してゐる筈では



ないか、その上に政治運動なする必要がどこにあらう？

この制限で見ると、ロシアの労働者はまた「政權」を握つてゐるのではないのだ。では一たい、だれがその政權を握つてゐるのだ？ 我々は今まで、ロシアの共産主義者から、ロシアでは労働者が政權を握つてゐるのだと耳がタコになるほど言ひかされたものだ。

しかし、これで見ると、ロシアの労働者は政治運動さへしてならないと云ふのだ。それではロシアやドイツの帝政時代と同じではないか、日本でもたしか昭和の聖代には、労働組合に政治運動といふものが許されてゐる筈だ。マルクス主義といふものは、労働者を封建時代に逆轉させる力をもつてゐる！

我々の常識では、ロシア共産黨政府のやり方はさつぱりわからないものだが、しかし、いはゆる労働政府ともあらうものが、労働組合の獨立を承認する條件としては、あまりに徹底した専制振りではないか。

この第五項の條件は、つまり、労働組合が主力となつて、政府に反抗してはならないと云ふのである。即ち政權は、労働者の手に在るのではなくて、共産黨政治家の手にあるのである。それを最も雄辯に、しかも率直に白状したのが、この一項目である。

現在でも、ロシア共産主義者は、政權は労働者の手にあると云つてゐる。しかし、その事實は、こんなもので

ある。こゝが政治家の胡麻化しである。このわけのわからぬところが、天啓のトランクである。正直な労働者がうまうまご一はい食ふ所以である。

彼等ロシアの政治家は、労働者が自主自治の運動を起すことを、虎のやうに恐れてゐるのである。そして彼等の虚偽の牙城に肉薄することに戦慄してゐるのである。

ロシア共産黨政府は、今や資本家と妥協し、その財力によつて政權を支持してゐるのである。そのために、彼等は最初ケレンスキイより政權を奪つた時の、労働者にたいする公約を一擲してむくい、否、その公約は、自己の手に政權を奪ふための一時の詐欺手段に他ならなかつたのである。それは彼等政治家の本質であつて、何等怪しむに足りない。

## 九、これでも過渡時代か？

ロシア共産主義者は、新經濟政策をもつて、一時の機宜の處置であり、過渡時代のやむを得ない政策であること云つてゐる。

この聲明には、たれでもちよつと迷ふ、だが、少しく深く考へたらば、それは一時の機宜の處置でも、また過



渡時代でもなんでもない、立派な資本主義への逆轉である。その證據には、共産黨政府は、年々、更に益々資本主義へ逆轉しつつある。

レーニンの死後、スターリン等の幹部派は、大農、中農の保護政策をやり出した。そして、廣大な耕地を提供して彼等からウンと多額の租税や穀物を徴収する策を講じてゐる。貧農はそのために壓迫されて、益々昔の農奴のやうに、大地主に使役されねはならなくなつた。彼等が政權にかちりついて行こうとすればするほど、それが必要になつて行くのである。過渡時代でもなんでもない、きわめて必然なことである。

またトロツキイは、アメリカの資本家を招致して、工業を發達せしめようとする主張してゐる。従來は、主としてドイツ、フランス等であつたが、最近、アメリカの資本家は素暗らしく景氣がいゝ、そこで彼はアメリカの資本家に投資を仰いで政府の財政を救はふと云ふのである。一九二六年の共産黨大會で、ジノゲエフの述べたところによると、そのために七億ルーブルの財源が得られるそうである。—こんなことを考へられては、もうロシアの共産黨もおしまひである。これでは資本主義國家の政治家と何等變りはない。これをしも。過渡時代であると、たれが云ひ得るか。

## 一〇、共産主義教育で救へるか？

しかし、またロシア共産主義を擁護するものは云ふたらう。現實はやむを得ない、ロシアには明日の共産主義教育がある、そして、明日のロシアの若い子供は、必ずそれを教ふと、

この聲明をきくと、一應もつともやうにきゝ取れる。が、よく考へてみれば、  
元來、教育と云ふものは何であるか、それはその時代の支配階級に適合するやうに、若い時代の人間を訓練することである。ロシアに於ては、共産黨政府の都合のいゝやうに訓練することである、即ち政府が労働組合に向つて「政治運動をするな」と命令するやうに、子供達にも彼等を政府に従順なる國民として訓練することである。従つて、彼等にはんさうのことを教へられはしない、地主と資本家の後援を得なければならぬ政府が、それに反抗せよ、その絶滅を期せよと、赤裸々に教へられはしない、たとひ一時は教へてゐても、いつかそれは去勢され、安んじ、生命のないものになつてしまふ、そして最後には、全く嘘を教へるやうになる。資本主義教育と同一の線まで來るに違ひない、そんな教育で、さうして労働者や貧農が解放されよう。



## 一一、政治的マルクス主義の崩壊

ここで、我々は、はつきりと、一つの、しかも大きい真理をつかむことができた。そして我々無産階級労働者、農民の進むべき、眞實の道を発見することができた。それは政治主義の否定である。そして自治主義の把握である。

政治は、たゞひそれが社会主義を理想とするものであつても、必然に資本主義と一致するものである。政治は資本主義の支持と擁護なくしては存在のできない本質を有してゐる。それは資本主義が支配と搾取を本質とするやうに、政治も支配と搾取を本質とするからである。故に政治の存在する限り、資本主義も存在する。政治と資本主義は、夫であり、妻である。兄であり弟である。そこに密接の結合があり、同一の血が流れてゐる。

その最も確實な、そして忠實な實證を、ロシアの共産黨政府が我々に教へてくれた。我々はこの偉大なる眞理の史實的教授に向つて感謝しなければならぬ。

ロシア共産主義者が、資本主義への逆轉を、一時の機宜の處置、或は過渡時代と云つて辯明してゐたことは、實は彼等の中央集權的都會政治主義の、極めて必然な、宿命的な歸結であつたのだ。中央集權的都會政治主義は

商工業資本家、及び大地主の支持と擁護を受けなければ、一日たりとも存在することができないのである。即ち資本主義的搾取手段によらねば一日も存在することができないのである。中央集權的都會政治主義—マルクス主義の崩壊である。

## 一二、悲劇的人物レーニン

レーニンは、その抱懐するマルクス主義をひつきけて、ロシアの民衆に臨んだが、ロシアはマルクスの説いたやうな結果の革命ではなくて、大戦の結果の叛亂であつたことは前に述べた。これはクリミア戦争にも、日露戦争の時にも同じことであつた。レーニンはその戦敗の結果起つた叛亂を、権力で統一して、そこへマルクス主義を捻ぢつけたのである。そしてその結果はさうであつたかは、以上に述べた如くである。

レーニンは政治的手段によつて、一切の社会組織の改造を行はうとした。これはマルクス主義である。だが、それはすぐ行き詰まつた。彼はその苦悶の中に悶死したと云つてゐるのである。

ここで云つて置くべきことは、レーニンといふ人物である。彼はグレンスキイのやうな凡庸な男ではなかつたことは確である。また、彼は政治家の本質である、ごまかしや、權謀術で労働者や農民を愚弄するやうな男で



なかつたことは確である。だが、彼は政治家であつた。むしろ彼は正直な政治家であつた。そこで彼自身では誠實に革命を遂行してゐるつもりであつたが、その遂行手段が、政治主義であつたために、却て資本主義に逆轉して來たのである。これはレーニンにとつて悲しむべき矛盾である。

彼はらつきよの皮を剥く狼である。一皮一皮剥いて行くうちに、手に残つたものは、無である。彼が焦慮苦心して新しい政策を一つづつ、行つて行くうちに、手に残つたものは資本主義である。

可哀想なレーニンよ、お前は政治主義の迷信に盲目となつた正直な政治家たつたのだ。らつきよの皮を剥く狼であつたのだ。そしてその狼のやうに、お前は悶死してしまつたのだ！ コミュニストも、その他の革命主義者も、この正直なレーニンを親切に弔つてやらねばならない。、、、

だが、また世界にも、日本にも、この正直な極小レーニンがある。我々は彼等に親切に忠告する。政治主義への迷信より目ざめよ！そして眞の人類解放の最高指標である、生産者自治主義に進めよ！

### 一三、生産者自治主義

自治は、政治と全く相反した立場を取るものである。それは上からの支配、即ち政治ではなくて、下からの結

合、即ち自主自立の團結である。労働者と貧農が、刻々に自覺するに従つて、この團結は刻々に成長するものである。そして労働者にあつては、労働者自治であり、農民にあつては、農民自治である。

自治には支配と搾取がない。それは自給自給を本質とするものだからである。それは生産者と労働者の結合だからである。そして何人も他人を支配し、搾取する必要がないがためである。農民は原生産に、工場労働者は加工に、勤労者は教育に、衛生に、その他人類生存の必要なる業務に。

自治には権力はない、権力とは他人を征服し、支配し、搾取するものであるからである。そして自治には自衛の力がある。即ち自治力が存在する。自治力は自己の生命保存のための防衛力である。即ち正常防衛力である。故に自治力は権力と全く異にする。

自治力は、必然に、権力と闘ふ。階級闘争は、實に資本主義的権力との闘争である。即ち搾取者に對する、被搾取者の正常防衛戦である。そこに闘争の正義が儼存する。自治主義は、正常防衛のためにあくまで闘争闘争主義ある。

自治主義は必然に地方的である。堅牢なる地方農民、労働者の自治圏を中心にするものである。そこに自由にして獨立なる團結の成長を促すものである。しかし自由とは無秩序を指すものでない。獨立とは孤立を指すもの



ではない。即ち堅牢なる地方自治圏は、秩序ある全国的の聯合を結成するものである。それを一貫する大きなパン  
ドは、熾烈なる農民、労働者の自主的解放精神である。そこに輝かしき無産階級の歡喜の握手がある。そこに人  
類最高の社會が規定されつゝある。

不正なるものは、やがてこの自覚ある農民労働者の自治的團結によつて、泡沫の如く消滅するであらう。そし  
て最も健全なる社會が漸次成長して行くであらう。

#### 一四、新時代への明確な智識、希望

今や日本の労働者と無産農民も、一切の政治的迷信から目ざめねばならぬ。曾て我々は宗教の迷信から目ざめ  
た。更に我々は政治の迷信からも目ざめねばならない。

ロシアの労働者も貧農も、またドイツの労働者も貧農も、政治的迷信に酔つて、政黨と政治家より欺瞞され、購  
罪されつゝある。我々は決して再び失敗をくり返してはならぬ。今だ、今しつかり、我々の進む道を定めて置か  
う！そしてそんなことがあつても、決して彼等に火事掘泥棒をされてはならぬ。彼等の甘言にのせられてはな  
らぬ。資本主義政治が封建主義政治の延長であるやうに「社會主義政治は、資本主義政治の延長なり」と云ふ眞

理を我々の肺腑にきざみつけて置かう。

そして我々は彼等をボイコットして、堅牢なる生産者自治の新時代へ進まう。そのために、我々は常にお互ひ  
に闘争、お互に研究し、しつかりした、また、はつきりした新時代への智識を作つて置かう！

本書では、共産黨政府の農民政策をも解剖したかつたのだが、そうすると非常に長くなるから、今度は  
これでやめる。農民政策の方は農民自治會パンフレットとして出したいと思つてゐる、この方面でくわし  
くは前にもちよつと書いたが、近刊、拙著「世界解放運動史講話」(東京葉芳閣版)を見てもらひたい。

(終り)



編者から

パンフレット刊行、それは、本會創立當時からの目的の一つであつたが、何しろ、其日の生活に追はれる食乏人許りの集まりだから、發行迄の苦心は並大抵ではなかつた。  
けれ共、今後引續き發行する心算だ。切に讀者諸君の御後援を望む。

豫告

自由メンフレット第二輯  
平井貞次君著

人間が機械になるまで

自由思想研究會

昭和二年一月廿五日印刷  
昭和二年一月廿八日發行

大阪市港區市岡町三六〇番地

發行編輯 遠藤喜一  
兼印刷人

大阪市港區市岡町三六〇番地

發行所 自由思想研究會

定價拾錢

中西伊之助著 東京新宿二ノ一聚芳閣發行  
世界解放運動史講話(近刊)

代價未定約八百頁  
イギリス、ドイツ、フランス、アメリカ、ロシア、イタリー、オーストリー、ハンガリー等の各國の労働運動、社會運動を最も公平、最も親切に初心の人々にもよく解るやう詳細に解説講話したるもので、未だかくの如き世界各國を網羅したるものはない。労働者農民の必携書で一讀、世界通となることかできる。金は後でもすぐ申込み。

申込所

自由思想研究會

和田久太郎君稿  
獄窓から

小作人の古い同人であつた久さんは、福田大將暗殺未遂事件で、今秋田の牢獄でその生涯を委れてゐる。彼が市ヶ谷刑務所に繋がれて居た時に書いた感想、隨筆、短歌、俳句、及び同志、友人に宛てた書簡を蒐めたものである。

▲菊牛裁判約三百五十頁

▲定價一圓五十錢

東京市本郷區駒込片町十五

労働運動社



古田大次郎君著

## 死の懺悔

東京市日本橋區數寄屋町一 春秋社

▼定價貳圓五十錢▲

- ▼著者は國法に觸れて刑臺の露と消えし人。國法は峻嚴である。ソクラテイスそれには甘んじて毒を仰いだ。本篇の著者も亦、喜んで死を迎えた。
- ▼時代は混亂を極めて居る、滔々と流れてゐる。鬼となるも聖となるも、たゞ一轉瞬の心の機微に屬する。著者は、實に時代の犠牲者ではなかつたか。
- ▼親を想ひ、友を想ひ、愛犬愛猫の末にまで、切々、思慕の情を寄せたる、蓋し著者の如きは、現代稀に見る純真多感の青年である。然も人を殺し、世に叛かねばならなかつた矛盾多き彼の心情は、實に血となり、涙となつて、此一篇に印刻されてゐる。
- ▼尙ほ、刻々と迫り來る、死に對する人間心の偽りなき研究的報告は、我文献上全く驚異に價すべきものであらう。

終